

夏休みの山日記から

小屋に帰る。暗い十間にはまた昨夜の名残の石油ランプが二つ、二つ天井からぶら下つて居る。白馬の頂上村営小屋の朝である。七時過ぎ依然として晴れぬガスの中を

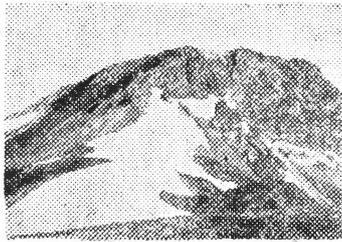
白馬八月
残りの雪を割りて
咲き出す
花の数

七月二十三日、青松に霧が流れて、シノキンバイの黄色い花が霧から吹き上げる風に揺られている。一面にかゝつたガスを頂上から御来迎を見ることを諦め、岩の間から流れ出る氷のような水で、そこそこ顔を洗いまた眠りから醒め切らぬ山

遠く南の方、針ノ木峠にまわつて、霧が流れて、シノキンバイの黄色い花が霧から吹き上げる風に揺られている。一面にかゝつたガスを頂上から御来迎を見ることを諦め、岩の間から流れ出る氷のような水で、そこそこ顔を洗いまた眠りから醒め切らぬ山。快な試みが初まった。即ち、秋山先生と加藤先生が冷陣をバコといふものを初められたのである。タバコのくぐりに、壁を叩いて、それを吸えば煙がいさゝかななりとも冷えるというのであるが、残念ながら未成年者の我々には、その真意を確かめる事は出来なかつた。充分休んだ私達は、又立ち上つて所々、難所に鉗金を張つた岩峰を一步二歩登つて行つた。

七月二十六日朝日の登り切らぬ間に針ノ木峠小屋を出て、膳敷を欲しいままにする為、蘆薈岳に登つた。先日から縦走し続けて来た白

馬を初めとした五龍岳、鹿島槍、爺子岳、赤沢岳と連なつて針ノ木峠に至る山々は、あるいは朝日に残雪を光らせ、あるいは、方角の関係で、シルエツトとなつて起伏していた。安曇野には、ぎつしりと雲海が広がりまた眠り続けていくやうであり、その遙か彼方に富士、南アルプス、八ツ岳と、望む



白馬から見た朝日岳(写眞部提供)

蕪も繻も多くの残雪と兵にモロクンローに照り映えている。交響曲のようなヴォオレムで綴つて居る。今日山々とも別れねばならない。私達は人の出はつた小屋に再び帰つてから、幾度も峠やスバリ針ノ木峠の緑の隙線を振り返りながら、針ノ木の大雪原をトつて行く。(T記)

ある手紙

昨日会つたばかりなのに、そしてあんなにもたくさん話を話し合つたばかりなのに……。

私は君に、感謝をこめて今朝のこの喜びをつけたかつたのだ。何と云ふ素晴らしい今朝の目覚めであつたところか。何時も私は窓を開け放して寝るのだが、サマータイムの習慣で、私はきまつて明け方に目を覚ます。今朝もそうだった。君も知つているあの二尺にたるぬ四角な窓。その窓には牢獄を思わせる鉄格子。暗い部屋の

講和(記念)平和の女神の彫像

二沢初代校長の銅像と同時に

講和条約の記念として本校には中庭のボーラー室の上に本校卒業生村岡三郎先生(二科の普通科)の手による今秋中に七尺位の平和の女神の彫刻を予定している。費用の方はPTAの有志の寄付による。

中に夜明の空が四角くかゝつていた。冷い睡の風が私の意識をはつきりさせた。いや、私の君に云いたいのはそれではない。それは今朝に限つたわけぢやない。要するにそれはいつも通りなのだ。私が云いたかつたのは、その時の私の心の力に充ちた安らかさなのだ。私は呟いた。「よし種をまき続けるのだ」。君が僕の、種の報酬を保障したのだ。

君はそんなにも成長した。それは僕の種だ。君は不満かも知れぬ。だが君の善性は僕の種だ。教師である僕は確信している。僕の種は君の成長が僕を確信させる。僕はさわやかに床をたゝんだ。そしてこの新しい力の回復を、感謝をこめて君に告げるのだ。僕は断じて大木先生にはならぬだらう。君よ僕の祝福と感謝を受け給え。

さよなら